

ラオス北部、ルアンナムター県訪問記

—ランテン族を訪ねて—

Research on Lanten Traditional Archives in Louang Nam Tha Province, Northern Laos

立石 謙次*
Kenji TATEISHI*

I. はじめに

2009年から2010年にかけて、3度ラオス北部を訪問する機会に恵まれた。今回（2010年3月）訪れることになったのは、ルアンナムター県を中心とした地域である。ルアンナムター県は、北は中国、西はミャンマーと境を接した地域である。同県の県庁所在地はター川（Nam Ta）のほとりである（図1、2）。

もともと中国史を専門とする私が何のためにラオスに行くのかと訝られた。問われるたびに面倒なので、「魔法使いに会いに…」と冗談を言っていた。しかし本当の目的は、ラオスの少数民族の一つであるランテン族が持つ漢文儀礼書の記録保存のための調査である¹⁾。

II. ランテン族について

ランテン族は、ミャオ・ヤオ語系の言語を話し、自称はユーモンである。中国ではヤオ族（ユーミエン）のサブグループとされている。彼らからの聞き取りによれば、もともと中国に住んでいたが、その後ベトナムを経由して、ラオスにやってきたという。ランテンという名の由来は、「藍靛^{らんてん}」（インディゴ）である。ランテン族の民



図1 ルアンナムターの位置関係図



図2 ルアンナムターの街

* 東海大学等非常勤講師／Tokai University, Japan

族衣装は、黒に近いほど色濃く藍で染められた綿布によって作られる。村では、自分たちでワタをつむぎ、布を織り、それを染める作業を見かける（図3）。彼らの生活は徐々に変わりつつあるものの、今でもこの深い藍色の民族衣装をまとい、髪を結い上げて、眉毛を抜いた「ランテン美人」に出くわす（図4）。

Ⅲ. 調査地のND村について

今回の調査で特にお世話になった村は、ルアンナムターの街の近郊にあるND村である。同村村長からの聞き取りによると、現在59世帯が暮らしている。この村は1970年代から80年代にかけて、複数の村の人たちが移住して作られた。本来、

ランテン族は移動しながら焼畑を行なって生活をしてきたと言われている。しかし現在では定住化が進んでおり、この村では焼畑・水田以外にも、近年ではゴムの栽培をおこなう家も出てきている（図5）。また村には大きな滝があって、村の観光資源になっている。このため、しばしばルアンナムターの街から外国人観光客がやってきている（図6）。



図3 染物に使うための藍液の攪拌
藍からとった液体に石灰を入れて攪拌すると、深い藍色に変わっていく



図4 既婚のランテン族の女性は、髪を剃って結い上げ、眉毛を抜く



図5 ND村の農地

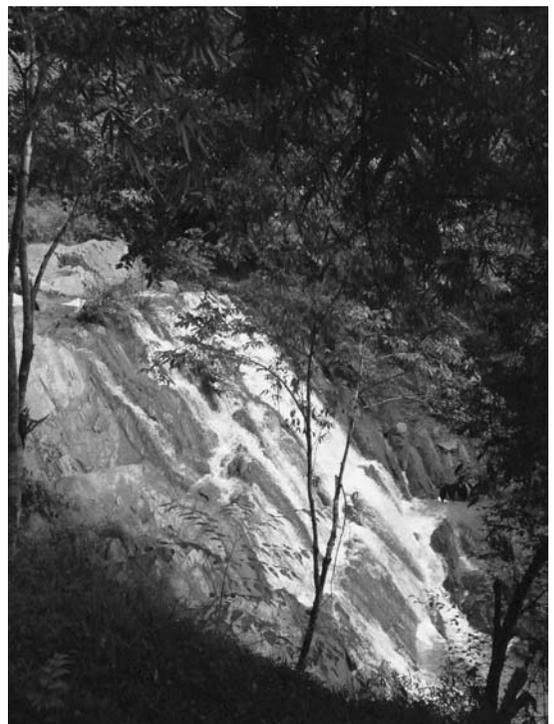


図6 ND村の滝

今回訪れたのは2010年3月17日（旧暦2月1日）であった。このとき、ランテン族の村は、「アイソン」（保苗節 - 漢語）というお祭りの最中であった。この期間、村人が草を刈るなど植物を傷つける行為は禁止される。そして村の入り口には「カット」と呼ばれる結界がはられる（図7）。村民以外は村の出入りを禁止される。しかしすでに述べたように、同村の滝は、外国人が訪問する有名な観光スポットになっている。このため、よそ者の入村も認められていた。ただ村長はこのとき、自宅に私たちを上げることはせずに、戸外で対応してくれた。

Ⅳ. 祭司と儀礼書

彼らが使用している漢文儀礼書に話を戻そう。ランテン族の生活の中では、正月やそのほか節



図7 村の入り口に立てられる「カット」



図8 儀礼を行なう祭司
子供の病気を治す儀礼を行なっていた。

句ごとの祭り、葬式、狩猟の祈願、病気の治療など、さまざまな場面で儀礼が行なわれる（図8）。彼らにとって、もっとも重要な儀礼は、成人儀礼である。理念上、この成人儀礼を祭司に行なってもらえた者だけが一人前と認められる。

（ただし経済上の理由等で、すべての人が成人儀礼を行なえるわけではない）。そして儀礼は、道教の影響を受けた大量の漢文儀礼書に基づいて行なわれる（図9, 10）。これらの儀礼書を読みこなし、儀礼を取りしきるのがアイマーンやナーマーンと呼ばれる祭司である。私が冗談で魔法使いと言っていたのは彼らのことである。アイマーンが儀礼書を読み上げて儀礼を行い、ナーマーンはこれを補佐する役割を担う。

彼らが使用する儀礼書は一冊だけではない。たとえば、私たちが調査を実施した家の一つにND村の村長宅がある。村長は祭司を兼ねている。村長宅には、重複分も含めて70冊近くの儀礼書が所蔵されていた（図11）。一つの儀礼の中では、複



図9 最も重要な儀礼書とされる
『大部南靈科』（表紙）



図10 『大部南靈科』（本文）



図11 ND村村長が所蔵する漢文儀礼書

数の儀礼書を用いられる。そして、どの書物のどの部分をどの順番で読むのかということが複雑に決められている。つまり儀礼において、これら書物の使用にはきわめて膨大な知識が必要となる。また、これら儀礼書の大部分は、声を出して読み上げるものの、「秘語」と分類される儀礼書は、黙読しなければならない。音読すれば災厄が起ると信じられている。おそらく軽々しく他人にその内容を知られないようにするためであろうか。

彼らがいつ、どこで漢文儀礼書を手に入れて、使用するようになったのかは現状ではわからない。彼らによれば、ランテン族の伝説上の先祖であり、神である「盤古」から儀礼書と儀礼の道具をもらい、その使い方を教えてもらったという。盤古は、中国の伝説上の犬のことであり、古くは5世紀に成立した『後漢書』に記述がみられる。盤古は盤瓠とも書く。盤瓠は中国の伝説上の帝王、すなわち五帝の一人である高辛氏（帝嚳）の飼犬であった。その飼犬が戎寇（外来民族の敵軍）の呉將軍の首を取ってきた功績によって、高辛氏の娘を娶った。そして、その子孫が繁栄して、一国をなしたとされている²⁾。この伝説は、ミャオ・ヤオ語系の言語を話す民族に広く伝えられている。

これまでの研究から、ランテン族と関係の深いヤオ族が漢文儀礼を利用しながら儀礼を行なうということは、よく知られている（白鳥，1975）。また現在、ドイツのミュンヘンにあるヴァイエレン州立図書館には、「ヤオ族経文」と称する資料群が所蔵されている（Obi and Müller, 2005,

p227-279）。同図書館では、これら資料群の目録をすでに作成しており、ヤオ族経文は850件を数えているという（Obi and Müller, 2005, p227）。ただしヤオ族とランテン族が使用する儀礼書は系統を異にしている（Obi and Müller, 2005, p259）。そして、このヴァイエレン州立図書館に所蔵されているヤオ族経文のほとんどは、このランテン族系の儀礼書であるという。残念なことに私は、この目録を未見である。また、この目録には図版が付されていないということなので、現状ではその実態を知る機会を得られていない。

V. 調査のこと

私たちの調査の目的は、①彼らが所有し、使用している漢文儀礼書をデジタルデータで収集、記録、保存すること、②これらを分類し解題を施した上で出版すること、③それをアーカイブに納めると同時に、調査に協力してくれたランテン族の人たちに配布することである。

ランテン族は、現在でもその生活の中で儀礼を行なっているものの、彼らは社会生活の変化、祭司の高齢化や後継者不足などの問題に直面している。このため、彼らの儀礼を中心とした伝統やそれを支える儀礼書が急速に失われつつある。私たちは、この研究により彼らが自身の伝統の価値を再確認できればと考えている。実際に儀礼書を記録するために、それぞれの家で儀礼書を拝見した。儀礼書は彼らにとって貴重なものである。



図12 調査風景

ボックスの中に儀礼書を入れて、一枚一枚ページをめくりながら撮影していく。

借り出して村から持ち出すということはしなかった。ただしこのために、私たちは結果的に儀礼書を拝見させてもらった方々の家を占拠してしまうことになった。記録作業は1日から、長い場合3日かかった。または1回の調査では、終わらない場合もあった。

彼らの家には、仕切りやプライベートな空間がない。最初、彼らは興味津々に私たちの調査を見ていた。しかし、これが2日も3日もかかれば正直たまらなかつただろう。それでも特に不平ももらさず、忍耐強く私たちの記録調査に付き合っていた。本当に感謝したい(図12)。

具体的な作業として、分担して写真撮影と聞き取りを実施した。写真は、見開き2ページを一枚ずつ撮影し、タイトル・抄写年代などを記録していく。また聞き取り調査では、村にかかわる基本的な状況、儀礼について、そしてそれぞれの儀礼における儀礼書の用途、使用箇所・方法・概要などについて聞き取った。

VI. 調査の現状と今後の展望

これまでの調査でわかってきたことは以下の通りであった。

- ① 儀礼書は大きく分けて読み上げるものと、「秘語」と呼ばれる黙読するものがある。秘語は、白い布に包まれているか、少数だが動物の毛皮で装丁されている。このため内容・タイトルなどが容易に見られないようになっていた。村長は当初、これを私たちに撮影させてよいかを悩んだそうである。しかし結局は調査の趣旨を理解し、記録に同意してくれた(図13)。
- ② 儀礼書以外にも、家族の系譜を示す家譜(ただし伝説的な祖先を記している)、墓地・村の位置などを決める風水書、歌垣³⁾の内容を記す歌集、食糧の貸し借りを記録する帳簿、漢字の辞書などがあった(図14, 15)。
- ③ 今後の課題となるが、彼らは儀礼書をおそらく広東語のような南方系の漢語で読み上げている。これはラオスに隣接している中国雲南地方の雲南語とは系統を異にする漢語である。雲南語は西南官話と呼ばれる北方系の漢語に属する。ラオス北部・ミャンマー東北



図13 毛皮で装丁される秘語
本を開かないと、タイトルが見えない。



図14 ランテン族の家譜

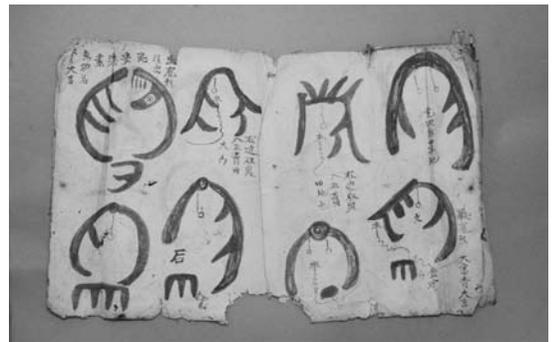


図15 風水書

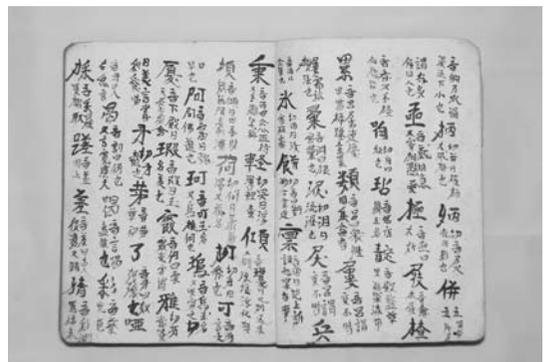


図16 村長が所蔵する漢字辞書

部、そしてタイ北部にかけての地域には、歴史的に雲南系漢人のホーと呼ばれる人たちがいる。しかしランテン族は、ホーなどが用いる北方系の漢語に依らず、自分たちの漢文儀礼書の伝統を保持していることになる。今回の調査では、村長が所蔵していた漢字辞書の漢字音について、音声データを記録した。この音声データを考察することにより、彼らが使用する漢語の系統を特定できると期待される(図16)。

今回私たちは、彼らが儀礼において使用する儀礼書を記録し、その目録を作成したにすぎない。今後の課題として、①儀礼書の記載内容の分析、②音声としての儀礼書の内容の記録・分析、③儀礼の様式と儀礼における儀礼書の使用方法の考察、などがある。

上記の諸問題の解明は、さらに彼らがいつ、どこで、誰からどのようにして、これら膨大な書籍と儀礼の知識を手に入れたのかというも問題にも直接かかわってくるものである。ひいてはランテン族をはじめとする中国南部からインドシナ半島にかけての広い地域における民族の移住史、中国の周辺民族による漢文・中国系宗教などの漢文化

需要の歴史的状況という問題に対して、新たな知見を与えると考えられる。

注

- 1) 本研究はトヨタ財団「アジア周辺部における伝統文書の保存、集成、解題」(H20～H22)より、「ラオス北部ランテンヤオ族民間伝統文書の保存・集成・解題」という研究課題で助成を受けている。研究代表者は富田晋介(東京大学)、研究分担者は清水 享(日本大学)、祖田亮次(大阪市立大学)、西川和孝(国士舘大学)、野本 敬(帝京大学)そして立石謙次である。2010年3月の調査では、岐阜大学大学院生の足達慶尚さんの協力を得た。小文冒頭の地図は、祖田亮次が作成したものである。
- 2) ちなみに、この説話をモデルとして、滝沢馬琴が『南総里見八犬伝』の冒頭を書いている。
- 3) 歌垣とは、若い男女が自分の恋愛の情を歌の形で相手に伝えることである。古代の日本でも行なわれていた。

参考文献

- 白鳥芳郎 編(1975)：『傜人文書』講談社。
Obi, L. and Müller, S.(詹春眉訳)(2005)：瑤族之宗教文献。『民俗曲芸』150。